

読売新聞 2001年11月

元九州派のこの作家はここ10年ほど黒一色の絵を描き続けてきた。合板のパネルに漆喰を塗り、あるいは海岸の細かい砂を敷き詰めて下地を作ったうえに、油絵の具を何重にも塗り重ねる。光沢のない独特の色調は絵の具が漆喰や砂に吸収されることから生じ、部分的に見られる灰色がかったむらは塗った絵の具を金属のヘラでこすり取った跡だ。おおむね水平に引かれた筆の痕跡も露に残されており、黒一色と言ってもそこには変化に富む微細なニュアンスがちりばめられている。

ミニマリズムとの表面的な親近性に目を奪われて、画面から表ニュアンスや表情が消し去られていないことを不徹底と見るなら、作品理解の糸口はふさがれてしまう。この作家の黒はモダニズムの還元主義とは全く別の文脈から生まれたものだからだ。自宅の庭の土をテーブルに盛っただけのものを、「筑後平野」と題して、美術館で発表したのは1970年のこと。以来、この人の手がけてきた形式の上では、抽象の仕事と見える作品はすべて本質において風景の写実だったと言うことができる。

抽象的写実といえ、形容矛盾であるようだが、対象の持つ具体性のリアリティを殺さずに世界を一枚の絵画に再現するという途方もない企てを遂行するには「一即多」というような非論理の論理によるしか道はないだろう。世界を抽象するその仕方自体がモダンな抽象とは違っているのである。黒の画面を前にして、なにか禅問答を挑まれているような気持ちになるのは、おそらくそういう事情による。草木虫魚に至るまで世界の一切を包み込んで生きさせる豊穡な黒、ということができるだろう。

尾花成春は1998年11月に福岡市天神のアートスペース糺で「海より」と題する個展を開いています。その時、読売新聞の小林清人氏（現在は退社？）に受けたインタビューが残っていました。1998年12月5日の夕刊に掲載されたようです。その時の絵への向き合い方、九州派時代の己の立ち位置など、画家の内面の片鱗が伺えるとてもいい記事なので紹介したいと思います。